

香川大学におけるデート DV の実態 —コンプライアンス教育のための実態把握—

大久保智生（教育学部准教授）

西本 佳代（大学教育基盤センター講師）

影山 澄香（教育学部 4 年）

1. はじめに

本研究の目的は、香川大学生のデート DV の実態を明らかにし、その結果をもとに大学におけるコンプライアンス教育の在り方について考察することである。

大学生の問題行動や犯罪などの不祥事は昔から存在していたが、現在では、学生の不祥事が生じると大学がメディアに向かって謝罪し、不祥事対策を講じ、それを発信する必要性が生じている。抑止のしようがない問題への対策を講じることの是非はともかくとして、近年、社会からの要請によって大学が不祥事対策としてコンプライアンス教育を強化しなければならない状況に陥っていることは確かである（大久保・西本、2016）。他方、大多数の学生は規範意識も高く、問題を起こさない（大久保・西本、2016）。そのため、単に、学生の規範意識を高めることだけを目的とするのではなく、他者が問題を起こした場合、あるいは起こしそうな場合にどう振る舞うかを考えさせること、すなわち規範意識が援助行動につながるような教育が、コンプライアンス教育の一環として求められる。

こうした問題意識から、大久保・西本（2016）は、コンプライアンス教育を行う際におさえておくべき、大学生の問題行動の実態について調査を行った。その結果、香川大学 1 年生においては、未成年飲酒や飲酒後の自転車運転などのアルコールに関する問題行動の該当者が比較的多いことなどが明らかになった。しかしながら、交際相手に対する問題行動については、被加害経験などを確認するにとどまり、十分にその実態を明らかにすることができなかった。

ストーカーやデート DV、リベンジポルノの問題など、近年、恋愛がリスク化した可能性があり、若者の恋愛離れが進んでいるという（牟田、2015）。恋愛すらリスク化した社会で、どのように他者との関係を構築するのか。問題が生じた際の被加害者にならないのはもちろんのこと、被加害者になった友人にどのように接するのか、あるいは交際相手との適切な関係をどのように想定するのかなど、ここから学生が学ぶべき点は多数あるはずである。そこで、本研究では、香川大学生を対象とした質問紙調査から、デート DV の実態を明らかにする。その結果から、大学におけるコンプライアンス教育の在り方について考察したい。

2. 先行研究の検討

本節では、先行研究の検討を行うが、その前に簡単にデート DV の概要について触れておく。デート DV は交際相手に対する問題行動としてとらえられる。デート DV はのちに夫婦間の DV へ発展する可能性もあるため、恋愛に興味を持ち始める高校や大学などでの予防教育を行うことが重要である（小泉・吉武、2008、武内・小坂、2011）。そもそも DV とは、配偶者や交際相手など親密な関係で起こる暴力のことであり（赤澤、2016、富安・鈴木、2008）、殴る、蹴るなどの「身体的暴力」、大声で怒鳴る、人前で侮辱するなどの「精神的暴力」、借りたお金を返さない、借金を負わせるなどの「経済的暴力」、避妊に協力しない、性行為を強要するなどの「性的暴力」などに分類される。DV という用語は、2001 年に「配偶者からの暴力防止及び被害者の保護に関する法律」が制定されたことで、家庭内で生じる配偶者からの暴力が社会的な問題として認知されるようになったと考えられている（赤澤、2016）。しかし、最近では配偶者間だけでなく高校生や大学生のカップル間にも夫婦間での DV と同じような現象、いわゆるデート DV が起きていることが指摘され、研究が行われるようになってきている（山口、2003）。

デート DV の先行研究では多くの人々がデート DV を経験していることが明らかになっている（内閣府男女共同参画局、2015、横浜市市民活力推進局、2008）。李・塚本（2005）の調査では、「精神的 DV」に関する行為に対しては多くの調査対象者が「暴力の場合も、そうでない場合もある」と回答しており、より多くの人がデート DV を経験している可能性が示唆されている。このように、デート DV については、行為の内容によって暴力であるかととらえるかどうかは異なっており、一貫していないことが明らかとなっている（赤澤、2016）。したがって、デート DV をどのようにとらえているのかというデート DV の認識について、行為の内容に基づいて詳細に検討する必要がある。先行研究ではデート DV の認識は許容の程度から検討されており、被害経験がある方がデート DV を許容する傾向にあることが示されている（笹竹、2014）。ただし、デート DV の加害経験とデート DV の許容の関係については詳細に検討されていないため、被害経験だけでなく加害経験の影響についても検討を行うこととする。また、そもそもデート DV と認識するにはデート DV に関する知識が必要である。知識がなければその行為がデート DV であると認識することができないため、デート DV に関する知識が及ぼす影響についても検討を行う。さらに、デート DV に対する意識として規範意識についても検討を行う。デート DV の経験によって、その行為が正当化されることにより規範意識が低くなると予想される。そして、デート DV の防止という観点から考えると、デート DV に対してどのように対処するのかについても焦点を当てる必要がある。被害に遭った際の対処については寺島・宇井・宮前・竹澤・松井（2013）や横浜市市民活力推進局（2008）が調査を行っており、相談を受けた後の対応については西村（2013）が調査しているが、友人がデート DV の問題を抱えている際にどのように対処するのかについては検討されてこなかった。したがって、本研究では友人のデート DV への対処に焦点を当てるだけでなく、どのような要因が友人のデート

DV の対処につながるのかについても検討を行う。

以上を踏まえ、本研究では、香川大学の学生を対象とし、コンプライアンス教育を行う際におさえておくべきデート DV の実態を把握することを目的とする。具体的には、まず、デート DV の被害経験および加害経験、デート DV の知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処の性別による差について検討する。次に、デート DV の被害経験および加害経験、デート DV の知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処の学年による差について検討する。さらに、デート DV の被害経験および加害経験、デート DV の知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処の恋愛経験による差について検討する。最後に、デート DV の被害経験および加害経験、デート DV の知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処の関連について検討する。

3. 方法

3-1. 調査協力者と手続き

2016 年 5 月に香川大学の学生 401 名（男性 189 名、女性 212 名、平均年齢 19.375 歳）に対して、質問紙調査を行った。所属学部は、教育学部が 184 名、法学部が 58 名、経済学部が 68 名、工学部が 32 名、農学部が 31 名、医学部が 28 名であった。

なお、調査協力者に成績と関連がないことや外部に回答結果が漏れないこと、調査協力者の回答結果は研究成果の発表にのみ使用され、回答結果は分析後に破棄されることを伝えることで、倫理面への配慮を行った。

3-2. 質問紙の構成

調査で使用したデート DV とされる行為 47 項目は、松野・秋山（2003）の調査、長・小堀（2013）の調査などを参考に作成した¹⁾。デート DV とされる行為 47 項目は、定義が明確なため因子分析は行わずに、「身体的 DV」（10 項目）、「精神的 DV」（24 項目）、「経済的 DV」（7 項目）、「性的 DV」（6 項目）のそれぞれに含まれる項目の得点を合計し、「身体的 DV」得点、「精神的 DV」得点、「経済的 DV」得点、「性的 DV」得点とした。

（1）フェイスシート：性別、年齢、学部、学年、恋愛経験の有無を尋ねた。

（2）デート DV の被害経験：作成した 47 項目に対して、「あなたは恋人や元恋人などから以下の行為をされたことがありますか」という教示の下、その行為をされたことがあるかどうかについて、「全くない」（0 点）「一・二度あった」（2 点）「何度もあった」（3 点）の 3 件法で回答を求めた。

（3）デート DV の加害経験：作成した 47 項目に対して、「あなたは恋人や元恋人などに以下の行為をしたことがありますか」という教示の下、その行為をしたことがあるかどうかについて、「全くない」（0 点）「一・二度あった」（2 点）「何度もあった」（3 点）の 3 件法で回答を求めた。

(4) デート DV の知識：作成した 47 項目に対して、「あなたは以下の行為がデート DV であることを知っていましたか」という教示の下、その行為がデート DV であることを知っていたかどうかについて、「知らなかった」(1 点)「知っていた」(2 点)の 2 件法で回答を求めた。

(5) デート DV の許容：作成した 47 項目に対して、「あなたは以下の行為が恋人の間で行われている場合、それをどのように思いますか」という教示の下、「許容できない」(1 点)から「許容できる」(4 点)までの 4 件法で回答を求めた。

(6) デート DV に関する規範意識：こうち男女共同参画センター「ソーレ」(2012)の調査を参考に、独自に 12 項目を作成した。作成した 12 項目に対して、「デート DV について、あなたの考え方に合うものに○を付けてください」という教示の下、「そう思わない」(1 点)から「そう思う」(4 点)までの 4 件法で回答を求めた。

(7) 友人のデート DV への対処：山口(2003)の調査を参考に、独自に 14 項目を作成した。作成した 14 項目に対して、「あなたの友達がデート DV の問題を抱えていたら、どのように対処しますか」という教示の下、「当てはまらない」(1 点)から「当てはまる」(4 点)までの 4 件法で回答を求めた。

4. 考察と結果

4-1. デート DV に関する規範意識尺度の検討

デート DV に関する規範意識 12 項目に対して、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。その結果を表 1 に示す。因子負荷量の絶対値 0.4 を基準に、2 因子 12 項目を採用した。第 1 因子は、「愛情があれば、デート DV をしてもかまわない」「おだやかに説明してもわからなければ、デート DV をしてもかまわない」など 7 項目から構成されていた

表 1 デート DV に関する規範意識の因子分析結果

項目	I	II
I デートDVの容認 ($\alpha = .793$)		
愛情があれば、デート DV をしてもかまわない	.773	-.116
おだやかに説明してもわからなければ、デート DV をしてもかまわない	.679	.005
デート DV をしても、謝れば許すべきだ	.642	.063
デート DV は軽ければ特に問題はない	.595	-.019
デート DV を乗り越えてこそ、二人の関係はより強いものになると思う	.578	-.072
デート DV は何があっても許されない	-.482	.293
デート DV をされるのは、される方にも原因があるからだ	.479	.010
II デートDVの否定 ($\alpha = .731$)		
自分はデート DV の被害者にはならないと思う	.079	.737
自分はデート DV の加害者にはならないと思う	-.055	.723
デート DV が生じるのは一部のカップルの話である	.190	.569
デート DV があるなら、すぐに別れるべきである	-.277	.531
デート DV がありながら、交際を続けることが理解できない	-.138	.464
固有値	2.763	1.997
寄与率	23.024	16.645
累積寄与率	23.024	39.669

ため、「デート DV の容認」と命名した。第 2 因子は、「自分はデート DV の被害者にはならないと思う」「自分はデート DV の加害者にはならないと思う」など 5 項目から構成されていたため、「デート DV の否定」と命名した。

尺度の信頼性を求めたところ、クロンバックの α 係数は、第 1 因子が $\alpha = .793$ 、第 2 因子が $\alpha = .731$ であり、信頼性が保証された。そして、各因子に含まれる項目の得点を合計し、それぞれ「デート DV の容認」得点、「デート DV の否定」得点とした。

4-2. 友人のデート DV への対処尺度の検討

友人のデート DV への対処 14 項目に対して、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果を表 2 に示す。因子負荷量の絶対値 0.35 を基準に、3 因子 12 項目を採用した。第 1 因子は、「相談されないように、デート DV の話題を避ける」「自分には関係のない話なので、適当に聞き流す」など 3 項目から構成されていたため、「話題の回避」と命名した。第 2 因子は、「友達に、そんな目にあっていいはずがないと言う」「友達にあなたの責任ではないと言う」など 6 項目から構成されていたため、「友人への助言」と命名した。第 3 因子は、「友達の嫌がっていることをさせようとししない」「自分の考えやアドバイスを押し付けけない」などの 3 項目から構成されていたため、「意思の尊重」と命名した。

尺度の信頼性を求めたところ、クロンバックの α 係数は、第 1 因子が $\alpha = .814$ 、第 2 因子が $\alpha = .697$ 、第 3 因子が $\alpha = .617$ であり、一応の信頼性が保証された。そして、各因子に含まれる項目の得点を合計し、それぞれ「話題の回避」得点、「友人への助言」得点、「意思の尊重」得点とした。

表 2 友人のデート DV への対処の因子分析結果

項目	I	II	III
I 話題の回避 ($\alpha = .814$)			
相談されないように、デート DV の話題を避ける	.871	-.022	-.026
自分には関係のない話なので、適当に聞き流す	.738	-.105	-.150
当人同士の問題なので、関わらないようにする	.705	-.229	.095
II 友人への助言 ($\alpha = .697$)			
友達に、そんな目にあっていいはずがないと言う	-.086	.599	.125
友達にあなたの責任ではないと言う	-.057	.536	.230
友達の話を、時間をかけてじっくり聞く	-.185	.506	.292
相手と別れるように、アドバイスする	-.016	.468	-.160
友達の言っていることを信じる	-.113	.466	.323
友達が信頼できる大人や相談機関などに話せるように、サポートする	-.144	.399	.289
III 意思の尊重 ($\alpha = .617$)			
友達の嫌がっていることをさせようとししない（無理やり別れさせるなど）	.107	.034	.705
自分の考えやアドバイスを押し付けけない	-.055	.116	.576
うわさが広まらないように、他の人に言いふらさない	-.092	.263	.465
固有値	1.900	1.645	1.444
寄与率	15.833	13.712	12.030
累積寄与率	15.883	29.545	41.576

4－3. 被害経験、加害経験、デート DV に関する知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処における性差の検討

被害経験、加害経験、デート DV に関する知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処における性差について検討するため、性別を独立変数とした t 検定を行った。その結果を表 3 に示す。

デート DV の被害経験では、「身体的 DV」得点 ($t = 1.729$ 、 $df = 174.319$ 、 $p < .1$)

表 3 性別ごとの各尺度の平均値と t 検定の結果

		男性 (N=188)	女性 (N=211)	t 値
デート DV の被害経験	身体的 DV	0.221 (0.913)	0.636 (2.484)	1.729†
	精神的 DV	2.788 (4.776)	4.453 (7.123)	2.042*
	経済的 DV	0.174 (0.578)	0.287 (1.017)	.929
	性的 DV	0.256 (1.267)	0.543 (1.556)	1.483
デート DV の加害経験	身体的 DV	0.108 (0.518)	0.203 (0.854)	.907
	精神的 DV	1.383 (2.411)	2.453 (4.383)	2.273*
	経済的 DV	0.108 (0.699)	0.118 (0.465)	.121
	性的 DV	0.133 (0.712)	0.094 (0.443)	.488
デート DV に関する知識	身体的 DV	18.749 (2.766)	19.062 (2.825)	1.107
	精神的 DV	38.132 (7.785)	36.457 (6.826)	2.248*
	経済的 DV	11.355 (2.823)	10.895 (2.688)	1.653
	性的 DV	10.596 (1.899)	10.763 (1.688)	.926
デート DV の許容	身体的 DV	11.380 (2.592)	10.943 (2.385)	1.739†
	精神的 DV	35.460 (8.980)	34.384 (8.253)	1.246
	経済的 DV	8.388 (2.224)	7.720 (1.325)	3.590***
	性的 DV	7.497 (2.386)	6.671 (1.698)	3.930***
デート DV に関する規範意識	デート DV の容認	11.583 (3.689)	10.166 (3.095)	4.053***
	デート DV の否定	14.433 (3.296)	14.195 (3.047)	.737
友人のデート DV への対処	話題の回避	6.287 (2.151)	5.402 (2.024)	4.184***
	友人への助言	18.094 (3.114)	20.191 (2.290)	7.463***
	意思の尊重	10.050 (1.744)	10.244 (1.478)	1.187

注：() 内は標準偏差。† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$ 。以下同様に表記。

において、女性のほうが有意に高い傾向があった。また、デート DV の被害経験では、「精神的 DV」得点 ($t = 2.042, df = 210.972, p < .05$) において、女性のほうが有意に高かった。デート DV の加害経験では、「精神的 DV」得点 ($t = 2.273, df = 203.599, p < .05$) において、女性のほうが有意に高かった。デート DV に関する知識では、「精神的 DV」得点 ($t = 2.248, df = 362.999, p < .05$) において、男性のほうが有意に高かった。デート DV の許容では「身体的 DV」得点 ($t = 1.739, df = 379.682, p < .1$) において、男性のほうが有意に高い傾向があった。また、デート DV の許容では「経済的 DV」得点 ($t = 3.590, df = 297.470, p < .001$) と「性的 DV」得点 ($t = 3.930, df = 331.547, p < .001$) において、男性のほうが有意に高かった。デート DV に関する規範意識では、「容認」得点 ($t = 4.053, df = 351.013, p < .001$) において、男性のほうが有意に高かった。友人のデート DV への対処では、「話題の回避」得点 ($t = 4.184, df = 388, p < .001$) においては男性のほうが、「友人への助言」得点 ($t = 7.463, df = 324.053, p < .001$) においては女性のほうが有意に高かった。

以上の結果から、女性のほうが身体的 DV と精神的 DV の被害経験があり、精神的 DV の加害経験もあり、友人がデート DV の問題を抱えた際に友人へ助言することが明らかとなった。一方、男性のほうが精神的 DV の知識があり、身体的 DV と経済的 DV と性的 DV を許容し、デート DV を容認し、友人がデート DV の問題を抱えた際に話題を回避することが明らかとなった。女性のほうが身体的 DV と精神的 DV の被害経験があり、精神的 DV の加害経験もあるという本研究の結果は、先行研究（小泉・吉武、2008、松野・秋山、2009）の結果ともほぼ一致していた。海外の研究（Frieze, 2005、White, Donat, & Bologna, 1989）も踏まえ、必ずしも男性が加害者であり、女性が被害者であるというわけではないという上野（2014）の指摘とも一致していた。ただし、女性の被害の方が深刻であるという指摘（上野、2014）もあることから、対策については慎重に考えていく必要があると言える。また、友人がデート DV の問題を抱えた際、男性は話題を回避するが、女性はアドバイスをするというのは、大学生の男女で友人の恋愛関係のとらえ方が異なることを示唆している。男性は友人の恋愛関係に関与しようとしませんが、女性は友人の恋愛関係に関与していくことが反映されているといえる。

4-4. 被害経験、加害経験、デート DV に関する知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処における学年間の差の検討

被害経験、加害経験、デート DV に関する知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処における学年間の差について検討するため、学年を独立変数とした 1 要因の分散分析を行った。その結果を表 4 に示す。

デート DV の被害経験では、「精神的 DV」得点 ($F(3, 208) = 3.360, p < .05$)、「経済的 DV」得点 ($F(3, 210) = 3.196, p < .05$)、「性的 DV」得点 ($F(3, 210) = 4.830, p < .01$)、デート DV の加害経験では「性的 DV」得点 ($F(3, 206) = 3.939, p < .01$)、デー

表 4 学年ごとの各尺度の平均値と 1 要因分散分析の結果

		1 年生 (N=176)	2 年生 (N=65)	3 年生 (N=94)	4 年生 (N=63)	F 値
デート DV の被害経験	身体的 DV	0.189 (0.886)	0.079 (0.359)	0.887 (2.915)	0.725 (2.602)	2.075
	精神的 DV	2.575 (4.259)	2.632 (3.635)	4.581 (7.327)	6.026 (8.922)	3.360*
	経済的 DV	0.068 (0.302)	0.079 (0.273)	0.403 (1.016)	0.475 (1.450)	3.196*
	性的 DV	0.027 (0.232)	0.211 (0.577)	0.726 (1.883)	0.925 (2.200)	4.830**
デート DV の加害経験	身体的 DV	0.097 (0.449)	0.054 (0.229)	0.361 (1.212)	0.100 (0.441)	2.019
	精神的 DV	1.563 (3.524)	1.405 (2.140)	2.467 (4.497)	2.875 (4.115)	1.644
	経済的 DV	0.028 (0.165)	0.108 (0.393)	0.197 (0.891)	0.154 (0.540)	1.048
	性的 DV	0.000 (0.000)	0.054 (0.329)	0.311 (0.958)	0.050 (0.316)	3.939**
デート DV に関する知識	身体的 DV	18.509 (2.946)	19.154 (2.152)	19.239 (3.259)	19.328 (2.047)	2.259
	精神的 DV	36.301 (7.443)	37.031 (7.038)	38.435 (7.432)	38.115 (6.839)	2.093
	経済的 DV	10.943 (2.750)	10.800 (2.852)	11.418 (2.785)	11.410 (2.623)	1.106
	性的 DV	10.451 (1.884)	10.877 (1.596)	10.815 (1.809)	10.934 (1.632)	1.811
デート DV の許容	身体的 DV	10.852 (1.942)	11.094 (1.917)	11.870 (3.745)	11.000 (1.875)	3.543*
	精神的 DV	33.653 (7.563)	34.938 (7.632)	36.570 (10.669)	35.952 (8.541)	2.748*
	経済的 DV	7.705 (1.153)	8.292 (2.163)	8.362 (2.327)	8.222 (2.067)	3.611*
	性的 DV	6.875 (1.878)	6.750 (1.480)	7.564 (2.773)	7.145 (1.906)	2.817*
デート DV に関する規範意識	デート DV の容認	10.566 (3.246)	10.762 (2.889)	11.478 (4.295)	10.656 (3.092)	1.470
	デート DV の否定	14.778 (3.199)	14.015 (2.902)	14.165 (3.490)	13.459 (2.579)	2.995*
友人のデート DV への対処	話題の回避	5.906 (2.247)	5.631 (1.781)	6.152 (2.213)	5.278 (1.889)	2.358
	友人への助言	19.041 (3.027)	19.385 (2.409)	18.935 (3.148)	19.918 (2.485)	1.779
	意思の尊重	10.444 (1.565)	10.047 (1.362)	9.913 (1.789)	9.836 (1.583)	3.501*

ト DV の許容では、「身体的 DV」得点 ($F(3, 391) = 3.543, p < .05$)、「精神的 DV」得点 ($F(3, 393) = 2.748, p < .05$)、「経済的 DV」得点 ($F(3, 394) = 3.611, p < .05$)、「性的 DV」得点 ($F(3, 392) = 2.817, p < .05$)、デート DV に関する規範意識では「否

定」得点 ($F(3, 380) = 2.995, p < .05$)、友人のデート DV への対処では「意思の尊重」得点 ($F(3, 384) = 3.501, p < .05$) において 4 群間に有意差が見られたので、Tukey 法による多重比較を行った。

デート DV の被害経験では、「精神的 DV」得点において 4 年生が 1 年生よりも有意に高く、4 年生が 2 年生よりも有意に高い傾向があり、「経済的 DV」得点において 4 年生が 1 年生よりも有意に高い傾向があり、「性的 DV」得点において 3 年生と 4 年生が 1 年生よりも有意に高かった。デート DV の加害経験では、「性的 DV」得点において 3 年生が 1 年生よりも有意に高かった。デート DV の許容では、「身体的 DV」得点、「精神的 DV」得点、「経済的 DV」得点において 3 年生が 1 年生よりも有意に高く、「性的 DV」得点において 3 年生が 1 年生よりも有意に高く、3 年生が 2 年生よりも有意に高い傾向があった。デート DV に関する規範意識では、「デート DV の否定」得点において 1 年生が 4 年生よりも有意に高かった。友人のデート DV への対処では、「意思の尊重」得点において 1 年生が 3 年生と 4 年生よりも有意に高い傾向があった。

以上の結果から、概して学年が上がるにつれて、被害と加害の経験が増え、デート DV を許容し、否定的にとらなくなることが明らかとなった。これは学年が上がるにつれ、人間関係が広がることにより様々な経験が増し、様々な事情を勘案するようになることが理由として考えられる。また、規範意識のデート DV の否定についても、様々な経験が増すにつれ、自分も被害者や加害者になることを想定できるようになっていくことが考えられる。友人のデート DV への対処においても、1 年生の方が相手を配慮した対処をとることが示されたが、これは調査時期が 1 年生にとって入学間もない 5 月であり、友人関係を形成する時期であったことが要因として考えられる。

4-5. デート DV に関する知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処における恋愛経験の有無の差の検討

デート DV に関する知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処における恋愛経験の有無の差について検討するため、恋愛経験を独立変数とした t 検定を行った。その結果を表 5 に示す。

デート DV の許容では、「身体的 DV」得点 ($t = 1.698, df = 358.109, p < .1$) と「精神的 DV」得点 ($t = 1.717, df = 383, p < .1$) において、恋愛経験のある者のほうが恋愛経験のない者よりも有意に高い傾向があった。友人のデート DV への対処では、「話題の回避」得点 ($t = 2.114, df = 384, p < .05$) において恋愛経験のない者のほうが恋愛経験のある者より有意に高かった。また、友人のデート DV への対処では、「友人への助言」得点 ($t = 1.962, df = 383, p < .1$) において恋愛経験のある者のほうが恋愛経験のない者より有意に高い傾向があった。

以上の結果から、恋愛経験があるほうがデート DV を許容し、その一方で友人のデート DV に対して助言をしやすいことが明らかとなり、恋愛経験が無いほうが友人がデート DV

表 5 恋愛経験ごとの各尺度の平均値と t 検定結果

		恋愛経験有り (N=169)	恋愛経験無し (N=218)	t 値
デート DV に関する知識	身体的 DV	18.981 (2.430)	18.679 (2.835)	1.105
	精神的 DV	36.912 (7.102)	37.488 (7.647)	.760
	経済的 DV	10.967 (2.688)	11.232 (2.860)	.930
	性的 DV	10.736 (1.797)	10.595 (1.816)	.759
デート DV の許容	身体的 DV	11.306 (2.928)	10.898 (1.727)	1.698 †
	精神的 DV	35.415 (8.893)	33.946 (7.515)	1.717 †
	経済的 DV	8.069 (1.740)	7.947 (1.931)	.653
	性的 DV	7.009 (2.048)	7.030 (1.959)	.099
デート DV に関する規範意識	デート DV の容認	10.807 (3.436)	10.842 (3.446)	.096
	デート DV の否定	14.161 (3.231)	14.518 (3.055)	1.093
友人のデート DV への対処	話題の回避	5.604 (2.014)	6.059 (2.206)	2.114*
	友人への助言	19.479 (2.658)	18.899 (3.143)	1.962 †
	意思の尊重	10.171 (1.547)	10.112 (1.688)	.356

の問題を抱えた際に話題を回避しやすいことが明らかとなった。これは恋愛経験があることにより、状況によっては暴力行為を許してしまいがちだが、友人がデート DV の問題を抱えた際には自分の経験と照らし合わせて、助言しやすいと考えられる。逆に、恋愛経験がないと、暴力行為を許さないが、友人がデート DV の問題を抱えた際には自分には何もできないと考え、話題を回避しやすいと考えられる。このように、恋愛経験はデート DV の許容やデート DV への対処において重要な要因の一つであることが示唆される。

4-6. 性別ごとの被害経験、加害経験、デート DV に関する知識がデート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処に及ぼす影響の検討

性別ごとの被害経験、加害経験、知識がデート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処に及ぼす影響について検討するため、男女別にパス解析を行った。その結果を図 1 と図 2 に示す。なお、被害経験、加害経験、知識、デート DV の許容については、「身体的 DV」得点、「精神的 DV」得点、「経済的 DV」得点、「性的 DV」得点を足し合わせて分析に用いることとした。

男性では、加害経験がデート DV の許容 ($\beta = .310, p < .001$) に有意な正の影響を与えていた。知識がデート DV の許容 ($\beta = -.296, p < .01$) とデート DV の容認 ($\beta = -.367, p < .001$) に有意な負の影響を与えていた。デート DV の許容が意思の尊重 ($\beta = -.253,$

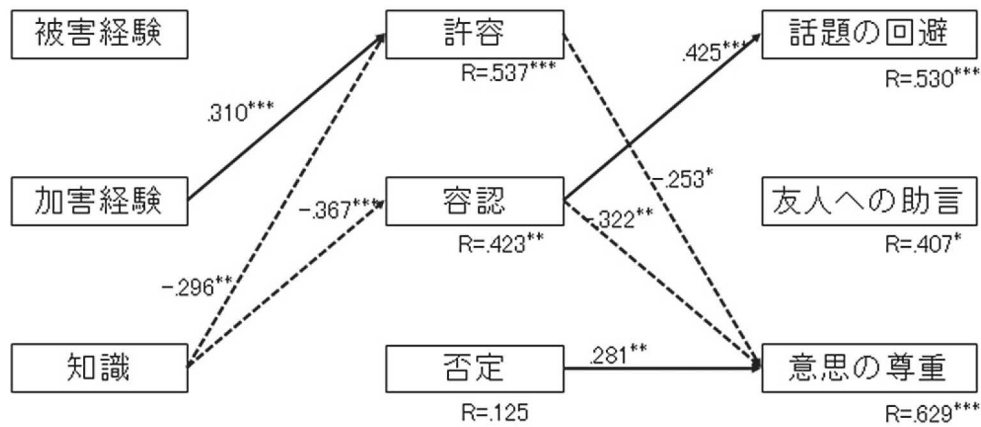


図 1 男性におけるパス図

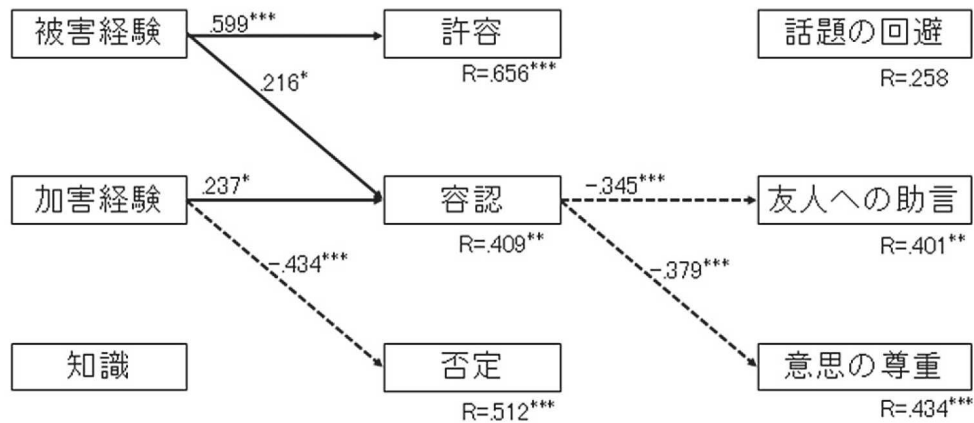


図 2 女性におけるパス図

$p < .05$) に有意な負の影響を与えていた。デート DV の容認が話題の回避 ($\beta = .425$, $p < .001$) に有意な正の影響を与えており、意思の尊重 ($\beta = -.322$, $p < .01$) に有意な負の影響を与えていた。デート DV の否定が意思の尊重 ($\beta = .281$, $p < .01$) に有意な正の影響を与えていた。

女性では、被害経験がデート DV の許容 ($\beta = .599$, $p < .001$) とデート DV の容認 ($\beta = .216$, $p < .05$) に有意な正の影響を与えていた。加害経験がデート DV の容認 ($\beta = .237$, $p < .05$) に有意な正の影響を与えており、デート DV の否定 ($\beta = -.434$, $p < .001$) に有意な負の影響を与えていた。デート DV の容認が友人への助言 ($\beta = -.345$, $p < .001$) と意思の尊重 ($\beta = -.379$, $p < .001$) に有意な負の影響を与えていた。

以上の結果から、男性ではデート DV の加害経験があるとデート DV を許容し、デート DV に関する知識があるとデート DV を許容せず、デート DV を容認しないことが明らかとなった。さらに、デート DV を許容し、デート DV を容認していると友人の意思を尊重する対処をしないようになることが明らかとなった。逆にデート DV を否定的にとらえていると友人の意思を尊重する対処をするようになることが明らかとなった。また、デート DV を容認していると話題を回避するようになることが明らかとなった。一方、女性ではデート DV の被害経験があるとデート DV を許容し、デート DV を容認することが明らかとなった。また、デート DV の加害経験があるとデート DV を容認し、デート DV を否定的にとらえないことが明らかとなった。さらに、デート DV を容認していると友人への助言を行わなくなり、友人の意思を尊重する対処をしないようになることが明らかとなった。男性と女性の大きな違いとしては、男性は知識がないことによってデート DV を許容したり、容認したりするが、女性は加害や被害経験によってデート DV を許容したり、容認したりするということが挙げられる。また、男性はデート DV の容認が友人への助言につながるが、女性は話題の回避につながることも挙げられる。したがって、男性は何がデート DV であるのかをきちんと学習し、もし友人が不適切な恋愛関係を築いていたら関与していくことが重要であり、女性は被害経験があっても容認しないようにすることが重要であるといえる。

5. おわりに

本研究では、香川大学の学生を対象として、コンプライアンス教育のためにデート DV の実態について検討を行った。まず、デート DV に関する規範意識と友人のデート DV への対処に対して因子分析を行った。その結果、デート DV に関する規範意識では 2 因子が抽出され、友人のデート DV への対処では 3 因子が抽出され、それぞれ一応の信頼性も確認された。次に、被害経験、加害経験、デート DV に関する知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処における性差について検討した。その結果、女性のほうが精神的 DV の被害経験があり、精神的 DV の加害経験もあり、精神的 DV の知識もあり、友人がデート DV の問題を抱えた際に友人へ助言することが明らかとなった。一方、男性のほうが経済的 DV と性的 DV を許容し、デート DV を容認し、友人がデート DV の問題を抱えた際に話題を回避することが明らかとなった。そして、被害経験、加害経験、デート DV に関する知識、デート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV への対処における学年差と恋愛経験の差について検討した。その結果、概して、学年が上がるにつれて、被害と加害の経験が増え、デート DV を許容し、否定的にとらなくなることが明らかとなった。また、恋愛経験が無いと友人がデート DV の問題を抱えた際に話題を回避することが明らかとなった。最後に、性別ごとの被害経験、加害経験、知識がデート DV の許容、デート DV に関する規範意識、友人のデート DV へ

の対処に及ぼす影響について検討した。その結果、男性と女性の大きな違いとしては、男性は知識がないことによってデート DV を許容したり、容認したりするが、女性は加害や被害経験によってデート DV を許容したり、容認したりすることが明らかとなり、男性はデート DV の容認が友人への助言につながらないが、女性は話題の回避につながらないことが明らかとなった。

これらの結果をもとに、デート DV に関するコンプライアンス教育について考察すると、大きく次の三点が指摘できる。第一に、デート DV に関する知識を教える重要性である。特に男性は、知識がないことによってデート DV を許容したり、容認したりする傾向がみられた。加えて、デート DV を容認していると話題を回避する傾向がある。そのため、まずは、デート DV に関する知識を丁寧に教える必要があるだろう。何がデート DV となるのかを教え、それが容認できない人権侵害であることを理解してもらう。そのことが、友人に対する積極的な関与へとつながっていくと期待される。

第二に、学生が、加害者や被害者となる友人に対して援助できるようになることを目指す必要性である。友人がデート DV の問題を抱えた際、男性は話題を回避するが、女性はアドバイスする傾向がみられた。これは男女における友人の恋愛に対する態度の違いと考えられ、一概に問題視すべき内容ではないのかもしれない。しかし、デート DV の防止という側面からは、やはり男性の変化を期待したい。自分がデート DV の問題を抱えないのはもちろんのこと、デート DV の問題を抱えた友人に対して援助できるようになることは、様々な問題に関心をもつことであり、社会とつながる一手段でもある。本研究は、その重要性を視野に入れて調査分析を行ったという点において、先行研究と一線を画しており、調査から得られた知見としてもこの点を強調しておきたい。

第三に、被害経験をもつ女性がデート DV を容認しないようサポートする必要性である。女性は被害経験がデート DV の許容や容認につながるという傾向がみられた。加えて、デート DV を容認していると友人への助言を行わなくなり、人の意思を尊重する対処をしないようになる。そのため、被害経験があったとしてもそこで受けた行為を肯定的に認識しないよう支援する必要があるだろう。ただし、それは自己の経験を否定的に捉えるということでもあり、教育で扱える範疇を超えているのかもしれない。必要であれば、医療機関などを頼り、教育の場面においては、抜け出しにくいデート DV の悪循環の構造や被害女性の置かれた状況、その背景に潜むジェンダーの根深い問題を伝えることで、デート DV が容認されないよう努めるほかないだろう。

以上、本研究の調査結果をもとに、デート DV に関するコンプライアンス教育について考察してきた。大久保・西本（2016）でも指摘したとおり、コンプライアンス教育の強化が新たな分断、排除を生んではならない。問題行動を起こさないのはもちろんのこととして、問題行動を起こした他者とどのような関係を築くのか。また、それを通してどのような社会を望むのか考えることが大学教育の場で求められているのではなかろうか。では、具体的にどのような教育を実践していくのか。デート DV については、恋愛関係にある 2

人の問題ではなく、周りの人間も含めた問題であるということを学べるような授業を構成する必要があるが、詳細については、稿を改めて論じたい。

今後の課題としては、まず、調査協力者を増やす必要があるだろう。本研究では、理系の学部や高学年の調査協力者が少なく、学部や学年によって調査協力者の数に偏りがあった。特に学部による実態や認識の差については、検討しなかった。学部によって認識が異なる可能性もあることから、学部ごとに調査協力者を増やし、学部によるデート DV の実態や認識についても検討する必要があるだろう。こうした検討を行うことは、大学生のデート DV を学部ごとにどのように理解し、支援や援助すればよいかについての一つの指針になると考えられる。

注

- 1) 調査で使ったデート DV とされる行為 47 項目は以下の通りである。身体的暴力（10 項目）：1. 身体を押し倒す、2. 平手で顔を殴る、3. 拳（グー）で顔を殴る、4. 物を使って身体を殴る、5. 身体を足で蹴る、6. 髪の毛を引っ張る、7. 身体を引きずり回す、8. 物を投げつける、9. 刃物で身体を傷つける、10. タバコの火を押しつける。精神的暴力（24 項目）：1. 机や壁などを殴る・蹴る、2. 大声で怒鳴りつける、3. 目の前で物をたたき壊す、4. 汚いことばでののしる、5. 凶器を見せる、6. 土下座させて謝らせる、7. 人前で恥をかかせる、8. 意に沿わないと無視する、9. 意に沿わないとにらむ、10. 相手の意志とは関係なく、物事を勝手に決める、11. 好みの髪型を指定する、12. 好みの衣服を指定する、13. 無断で相手の携帯のメールや着信履歴を見る、14. 無断で相手の携帯のメールアドレスや電話番号を消す、15. 同性の友人との付き合いを制限させる、16. 異性の友人との付き合いを制限させる、17. いつも行き先を告げさせたり、報告させたりする、18. 日に何回もメールや電話をする、19. どこに行くにも相手についていく、20. どこに行くにも相手を連れまわす、21. 異性と一緒にいたり、したりすると嫉妬する、22. 別れるなら死んでやると言う、23. 相手の家族を否定する、24. 相手を否定したり、相手の意見を認めない。経済的暴力（7 項目）：1. デートなどで、いつもお金を相手に払わせる、2. お金を貢がせる、3. 借りたお金を返さない、4. 外で働くこと（アルバイトなど）を妨害する、5. 洋服などを買わせない、6. 借金を負わせる、7. 収入や預金を勝手に使う。性的暴力（6 項目）：1. 相手が望まないのに、無理矢理性交渉する、2. 避妊しない、3. 性交渉に応じないと不機嫌になる、4. 無理にポルノビデオやポルノ雑誌を見せる、5. 暴力的な性行為をする、6. 中絶を強要する。

参考文献

- 赤澤淳子（2016）「国内におけるデート DV 研究のレビューと今後の課題」『人間文化学部紀要』16、128－146 頁。
- Frieze, I. H. (2005) Hurting the one you love: Violence in relationships. Belmont, CA:

Thomson Wadsworth.

小泉奈央・吉武久美子(2008)「青年期男女におけるデート DV に関する認識についての調査」『純心現代福祉研究』12、61－75 頁。

こうち男女共同参画センター「ソーレ」(2012)「若い世代対象男女共同参画とデート DV に関する意識調査」(<http://www.sole-kochi.or.jp/info/dtl.php?ID=578>) < 2016 年 11 月 20 日アクセス>

松野真・秋山胖(2009)「若年層における特定異性間の暴力(dating violence)に関する研究:大学生を対象とした dating violence に関する意識・実態について」『生活科学研究』31、117－128 頁。

牟田和恵(2015)「愛する」牟田和恵・伊藤公雄編『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社、66－79 頁。

内閣府男女共同参画局(2015)「男女間における暴力に関する調査」(http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/h26_boryoku_cyousa.html) < 2016 年 11 月 20 日アクセス>

西村愛里(2013)「大学生のデート DV の実態(1):沖縄大学学生へのアンケート調査における被害・加害の実態」『地域研究』12、57－73 頁。

大久保智生・西本佳代(2016)「香川大学 1 年生の問題行動の実態:コンプライアンス教育のための実態把握」『香川大学教育研究』13、41－53 頁。

李璟媛・塚本宜子(2005)「ディティン グ DV に関する研究:大学生の実態調査に基づいて」『宮崎大学教育学部文化学部紀要』13、1－18 頁。

笹竹英穂(2014)「大学生の心理的デート DV の被害経験の実態および被害の認識」『学生相談研究』35、56－69 頁。

杉本元子・清水栄司(2015)「デート中の暴力(デート DV)を防止するための e-ラーニング・コンテンツの開発及びその有効性に関する予備的研究」『千葉医学』91、199－208 頁。

武内珠美・小坂真利子(2011)「デート DV 被害女性がその関係から抜け出すまでの心理的プロセスに関する質的研究:複線径路・等至性モデル(TEM)を用いて」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』33、17－30 頁。

寺島瞳・宇井美代子・宮前淳子・竹澤みどり・松井めぐみ(2013)「大学生におけるデート DV の実態の把握:被害者の対処および別れない理由の検討」『筑波大学心理学研究』45、113－120 頁。

富安俊子・鈴井江三子(2008)「ドメスティック・バイオレンスとデート DV の相違および支援体制の課題」『川崎医療福祉学会誌』18、65－74 頁。

上野淳子(2014)「デート DV 研究の問題点」『四天王寺大学紀要』57、195－206 頁。

良香織・小堀尋香(2013)「デート DV の現状と課題:大学生を対象とした調査から」『宇都宮大学教育学部紀要』63、211－219 頁。

White, J. W., Donat, P.L.N., & Bondurant, B. (2001) A developmental examination of

violence against girls and women. In R. K. Unger (Ed.), Handbook of the psychology of women and gender. New York: John Wiley & Sons. (=森永康子・青野篤子・福富護 監訳 (2004)『女性とジェンダーの心理学ハンドブック』北大路書房)

山口のり子 (2003)『デート DV 防止プログラムの実施者向けワークブック』梨の木舎。

横浜市市民活力推進局 (2008)「デート DV についての意識・実態調査報告書」(<http://www.city.yokohama.lg.jp/seisaku/danjo/chousa/19datedvcyousa/19datedvcyousaall.pdf>) < 2016 年 11 月 20 日アクセス >